

詩篇132-138篇「とこしえの祝福」

1A ダビデにある都上り 132

1B 安息の住まい 1-12

2B シオンからの祝福 13-18

2A 兄弟の一致 133

3A 賛美の奉仕 134

4A 御名への賛美 135

1B 麗しく、大いなる方 1-7

2B 永久に及ぶ御名 8-21

5A 永久に続く恵み 136

1B 天地創造にて 1-9

2B 出エジプトから約束の地 10-22

6A シオニストの詩篇 137

7A とこしえに変わらぬ恵み 138

1B 御言葉のゆえの御名 1-5

2B 成し遂げられる主 6-8

本文

私たちは詩篇 131 篇まで読みました。続けて 132 篇から読みます。120 篇から 134 篇までが「都上りの歌」です。私たちは前回、これは単にエルサレムである祭りのために都上りするという歌ではなく、主ご自身が住まわれる所に向かうという霊的な旅であることを学びました。ですから、私たちが、天のエルサレムに向かう地上での生活、また主が私たちの間に住まわれるという意義を見ることができます。

1A ダビデにある都上り 132

1B 安息の住まい 1-12

132 都上りの歌 132:1 主よ。ダビデのために、彼のすべての苦しみを思い出してください。132:2 彼は主に誓い、ヤコブの全能者に誓いを立てました。132:3 「私は決して、わが家の天幕には入りません。私のために備えられた寝床にも上がりません。132:4 私の目に眠りを与えません。私のまぶたにまどろみをも。132:5 私が主のために、一つの場所を見だし、ヤコブの全能者のために、御住まいを見いだすまでは。」

この都上りの歌は、都上りのオリジナル、第一回目のことを取り上げています。それは、ダビデが、キルヤテ・エアリムの、祭司オベデ・エドムの家に長いこと安置されていた神の箱を動かして、エブス人から奪還したエルサレムの町に運び入れるためです。主は、シナイの荒野においてモーセに、神の箱を造りなさいと命じられました。その中には契約の板、十戒が刻み込まれています。

その上に贖いの蓋があり、神の御座のそばで主への礼拝を導く天使長ケルビムが彫られています。その二人のケルビムの間から、わたしはあなたがたに語りと言われました。そこはまさに、地上において天における神の王座に近づける所だったので。

イスラエルは、幕屋によって神の箱を運ぶ生活を送っていました。それはあたかも、キリスト者がこの地上で聖霊による神のご臨在を示しているようです。私たちがイエスの御名によって集まるところに、御霊によってキリストが只中にいてくださり、そしてこの地上を旅人のようにして天の故郷を求めながら生きています。けれども、いつまでもその状態であるわけではありません。神は、イスラエルの民に対して、ご自身が選ぶ場所で祭壇を築き、そこで、いけにえを捧げるように命じられました。神の箱が移動するのではなくご自分が選ばれた所に留まり、そこに主は住まわれて、そこから主が王として統治されるということを意図されていたのです。すなわち、エルサレムに神の箱を移動させるというのは、つまりは神の国がこの地上に到来することを意味しています。このことによって、神の民はこの地上における戦いを終えて、安息に入ることができるのです。

私たちキリスト者も同じです。御霊によって私たちは、キリストの流された血によって聖められた、神の御座に近づくことができます。私たちは聖霊のご臨在をもっともっと、求めなければいけません。けれども、主が戻ってこられて神の住まわれる天に入り、そしてそこで初めて安息を得るのです。ヘブル書 4 章 11 節には、「私たちは、この安息にはいるよう力を尽くして努め」なさいと命じられています。天の中に入ることによって、ようやく安息に入ることができます。そこでダビデはここで、二つのことを述べています。一つはこの地上において、彼は戦いと苦しみがありました。その葛藤は、彼が主を尋ね求めているからに他なりません。もう一つは、神の国が確立するために私は眠ることもないとして、御国が実現することを熱烈に求めていることです。

132:6 今や、私たちはエフラテでそれを聞き、ヤアルの野で、それを見いだした。132:7 さあ、主の住まいに行き、主の足台のもとにひれ伏そう。132:8 主よ。立ち上がってください。あなたの安息の場所に、おはいりください。あなたと、あなたの御力の箱も。132:9 あなたの祭司たちは、義を身にまとい、あなたの聖徒たちは、喜び歌いますように。

ダビデがエルサレムに神の箱を運び入れる、その行進のところを指しています。初めは車に乗せてしまって、ウザが箱に触れて死んでしまいましたが、それでオベデ・エドムの家にダビデはしばらくの間、そこに安置させていました。しかし、その家が祝福されたのを見て、主はもう怒っておられないことを知り、導きを感じました。それで今度は、主がモーセに命じられたように、レビ人に契約の箱の横棒で担がせて、いけにえを捧げさせながら進んだのです。

6 節の「エフラテ」というのは、ベツレヘムを指しています。ダビデの出身の町です。それから「ヤアル」は、キリヤテ・エアリムのことを指しています。つまり、神がダビデを選び、そしてダビデによって祭司の家から運び出すようにされたということです。それから、「あなたの祭司たちは、義を身にまとい」ますように、と願っています。義を身にまとうとは、神との正しい関係に入りますように、

ということです。身にまとうという言葉は適切で、この正しさは自分の行いによるのではなく、神の下さる賜物だということです。まさに、信仰による義を指しています。キリストによって神がしてくださったこと、それを受け入れるという信仰の姿勢を指し示しています。

132:10 あなたのしもべダビデのために、あなたに油そそがれた者の顔を、うしろへ向けないでください。132:11 主はダビデに誓われた。それは、主が取り消すことのない真理である。「あなたの身から出る子をあなたの位に着かせよう。132:12 もし、あなたの子らが、わたしの契約と、わたしの教えるさとしを守るなら、彼らの子らもまた、とこしえにあなたの位に着くであろう。」

実は、この詩篇の祈りはソロモンの祈りを反映したものです。ダビデは神の箱をエルサレムに入れて、それからそこに天幕を張りました。そこで主を礼拝しました。しかし、エルサレムにて自分のための宮殿を立てています。それで、「自分は杉材の家に住んでいるのに、神の箱は天幕に留まっている。」と言いました。しかし、主はダビデが神の家を建てるのを拒みました。そうではなく、もっとすぐれた約束を与えておられたからです。それは、ダビデはこれまで神の国に入るまでの戦いを象徴していた人物ですが、彼の世継ぎの子はその戦いが終わり、平和が支配することを象徴する人になるということです。その子がソロモンでした。それでダビデはまだ幼いソロモンのために、主に示されたように神殿の見取り図を描き、そして神殿に必要な資材もなるべく用意しました。

ダビデ亡き後、ソロモンは七年の月日を費やして神殿を建てました。そして神殿を奉献します。それでこう祈ったのです。「歴代誌第二 6:41-42 そこで今、神、主よ。あなたもあなたの御力の箱も立ち上がって、休み所におはいます。神、主よ。あなたの祭司たちの身に救いをまとわせてください。あなたの聖徒たちにいつくしみを喜ばせてください。神、主よ。あなたに油そそがれた者たちの顔を退けないでください。あなたのしもべダビデの忠実なわざの数々を思い起こしてください。」主がダビデに、世継ぎの子によってとこしえの御国を立てられる約束をされましたが、その世継ぎの子である自分自身や、その後の王たち、油注がれた者たちがダビデへの約束と、また彼の忠実な行いのゆえに、見捨てないでくださいと祈っているのです。

けれども、主はその子が主に聞き従うのであれば、約束を叶えることをダビデに仰っていました。ソロモンは主を愛していましたが、最後に外国の女を愛して、それから外国の神々に仕え始めました。そして歴代の王たちは、その戒めを守りません。しかし、主はそれでもソロモンの祈りを聞かれています。それは、ダビデからキリストを出して、その子が御国の王となるという約束です。

2B シオンからの祝福 13-18

132:13 主はシオンを選び、それをご自分の住みかとして望まれた。132:14 「これはとこしえに、わたしの安息の場所、ここにわたしは住もう。わたしがそれを望んだから。132:15 わたしは豊かにシオンの食物を祝福し、その貧しい者をパンで満ち足らせよう。132:16 その祭司らに救いを着せよう。その聖徒らは大いに喜び歌おう。

主はソロモンの祈りに答えられました。確かに、ここシオンをご自身の住まいとして、そこを安息とするということです。そして、ここから祝福を与えると約束されています。私たちは前回、エルサレムの平和のために祈れ、という命令を読みました。その平和というのは、単に戦いが起こっているのがなくなるのではなく、人々が結びつき豊かにされる、また繁栄するということを意味しています。戦いがなければ確かに繁栄します。私が 2010 年に聖地旅行をした時に、個人でパレスチナ自治区に入る旅もしました。自治区の首都ラマラは、意外にも栄えている町でした。けれども、それはテロリストが事件を起こしていなかったため、イスラエルが検問所などの制限を減らしていったためであり、人々の行き来や物流も多くなったからに他なりません。隔ての壁がなくなれば、それだけ経済的にも繁栄します。これは霊的にも同じであり、私たちの間に隔ての壁がなくなればそれだけ、その結びつきで豊かになるのです。神はシオンを選び、そこを平和にし、そして食物も満たしてくださいませ。

それから、「その祭司らに救いを着せよう。」と言われていました。先ほどは、祭司たちに義を身にまかせてくださるようにと祈っていましたが、その通りに主がしてくださっています。義を身にまとうこと、それがそのまま神の救いであります。私たちが不義の中で神の怒りを受けなければいけないところを、神が憐れみその不義を取り除いてくださるだけでなく、ご自身の義を私たちに下さるのです。そのことによって私たちを救ってくださいませ。それを聖徒たちは喜び歌うのです。

132:17 そこにわたしはダビデのために、一つの角を生えさせよう。わたしは、わたしに油そそがれた者のために、一つのともしびを備えている。132:18 わたしは彼の敵に恥を着せる。しかし、彼の上には、彼の冠が光り輝くであろう。」

ここに、キリストの約束があります。一つの角というのは、力と権威を表します。バプテスマのヨハネの父ザカリヤが、これがキリストであることを指してこう歌いました。「ルカ 1:69 救いの角を、われらのために、しもべダビデの家に立てられた。」そして、一つのともしびというのは希望の光ですが、アビシャイがダビデに使ったことのある言葉です(2サムエル 21:17)。キリストが王となることで、この方がイスラエルの光となってくださるということです。そして、キリストに冠が光輝きます。

2A 兄弟の一致 133

そして、午前礼拝で学んだ 133 篇に入ります。

133 都上りの歌。ダビデによる 133:1 見よ。兄弟たちが一つになって共に住むことは、なんというしあわせ、なんという楽しさであろう。133:2 それは頭の上にそそがれたとうい油のようだ。それはひげに、アロンのひげに流れてその衣のえりにまで流れしたたる。133:3 それはまたシオンの山々におけるヘルモンの露にも似ている。主がそこにとこしえのいのちの祝福を命じられたからである。

イスラエルの国は、いつも分裂の危機にありました。ユダ部族はそれだけで、やっていける大きな部族でした。そして、北にはエフライム族があります。そこも豊かな部族でした。そしてサウルがユダの北にあるベニヤミン族から出てきます。サウルの家来であり婿であったダビデですが、サウルがダビデを殺そうとしたために、彼は逃げていきました。そうしている間に彼の周りに人々が集まりました。サウルが死にました。すると、サウル家の息子が後継者として立てられましたが、ユダの民はダビデをヘブロンで即位しました。そしてしばらく、サウル家とダビデ家の間に戦いが続き、それでようやく、イスラエルがユダの王ダビデに付き、それで統一イスラエルになったのです。ですから、ダビデにとって、「兄弟たちが一つになって共に住むこと」ことは、確かに幸せで楽しかったに違いありません。

しかし、イスラエルに兄弟げんかがあったように、私たちキリスト者にも兄弟げんかがあります。喧嘩する程仲が良いと言われるますが、しかし主は赦し合いなさいと命じられております。そして、これができるのは、上からの祝福です。133 篇は 132 篇の続きであります。シオンにおいてキリストが御座に着き、そしてシオンから祝福が天からの露のように降りてくるから、初めて一つになることができます。私たちの内に愛が枯渇しているから、いや私たちには愛せないと悟るからこそ、上からの祝福を求めるのです。

そして、詩篇また、今日学んでいる箇所は「とこしえ」という言葉が数多く出てきます。136 篇には、「恵みがとこしえまで」という言葉が何度も出てきます。それは、私たちが信じているのは、永遠の神だからです。とこしえに生きておられる神が祝福をされるので、それはとこしえの命の祝福なのです。「神はまた、人の心に永遠への思いを与えられた。(伝道 3:11)」とあります。私たちは永遠に触れるからこそ、その霊が満足します。その霊が安きを得ます。はるか先の将来に起こることも、霊の中で前もって味わい楽しむことができます。そして、私たちはそれを楽しむように、神から造られたのです。人は、その時が楽しければよいというようには造られていないからです。

3A 賛美の奉仕 134

都上りの歌の最後です。

134 都上りの歌 134:1 さあ、主をほめたたえよ。主のすべてのしもべたち、夜ごとに主の家で仕える者たちよ。134:2 聖所に向かってあなたがたの手を上げ、主をほめたたえよ。134:3 天地を造られた主がシオンからあなたを祝福されるように。

兄弟たちが一つになり、そこに幸せと楽しさがありますが、最後はその宮で賛美があります。いや、賛美だけでなく、主からの祝福があります。実は、「ほめたたえる」も「祝福する」もヘブル語では、バラフという同じ言葉が使われています。つまり、主が豊かにシオンで祝福していただき、そして聖徒たちが主を祝福し、あるいは、ほめたたえ、それで主がさらに私たちに祝福するという循環です。このことを永久に行なうのが、シオンであり、すなわち天の御国であります。すばらしいですね、私たちはこのような永遠の希望を持っています。

そしてここで、「夜ごとに主の家で仕える」とありますね。これは、ダビデが神殿において二十四時間、賛美が絶えないようにさせていたからです。(1歴代 9:33)なぜ、夜にまでそのようにさせていたのか？それは、天がそのようになっているからです。「黙示録 4:8 この四つの生き物には、それぞれ六つの翼があり、その回りも内側も目で満ちていた。彼らは、昼も夜も絶え間なく叫び続けた。「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな。神であられる主、万物の支配者、昔いまし、常にいまし、後に来られる方。」」ダビデは、自分の熱心さによって闇雲に、夜に働かせていたのではなく、明らかに天からの啓示を受けていて、神殿が天の実体を表すところなのだという使命を持っていたのだと思われます。

4A 御名への賛美 135

1B 麗しく、大いなる方 1-7

135:1 ハレルヤ。主の御名をほめたたえよ。ほめたたえよ。主のしもべたち。135:2 主の家で仕え、私たちの神の家の大庭で仕える者よ。

都上りの歌は終わっていますが、134 篇の続きになっています。主の宮の中で何をするのか？それは、主をほめたたえること、この方を祝福することです。「ハレルヤ」という言葉、これはそのままヘブル語から取ってきている言葉で、「神をほめたたえる」という意味です。この言葉とアーメンだけは、キリスト者であれば世界共通ですね。私たちが言語が異なっても、ハレルヤと歌う時に、実に霊が一つになっていることを思います。それは天の幻の中に導き入れられているからです。

135:3 ハレルヤ。主はまことにいつくしみ深い。主の御名にほめ歌を歌え。その御名はいかにも麗しい。135:4 まことに、主はヤコブを選び、ご自分のものとされ、イスラエルを選んで、ご自分の宝とされた。

主をほめたたえている理由を述べています。第一に、主が慈しみ深いという事実からです。その慈しみ深さは、ヤコブを選び、そしてご自分の宝とされたというところにあります。なぜ、このような小さき者が選ばれなければいけないのか、それは神が一方的にただ愛しておられるからです。キリスト者に対しても、同じ愛の選びを行ってくださいました。「エペソ 1:5 神は、ただみこころのままに、私たちがイエス・キリストによってご自分の子にしようと、愛をもってあらかじめ定めておられたのです。」

135:5 まことに、私は知る。主は大いなる方、私たちの主はすべての神々にまさっておられる。135:6 主は望むところをことごとく行なわれる。天で、地で、海で、またすべての淵で。135:7 主は地の果てから、雲を上らせ、雨のためにいなずまを造り、その倉から風を出される。

主をほめたたえるのは、第二に大いなる方だからです。他にも神々と呼ばれるものがあったとしても、この方は比類なきお方です。天と地を造られ、ご自分の望むところをことごとく行われます。

2B 永久に及ぶ御名 8-21

135:8 主はエジプトの初子を人から獣に至るまで打たれた。135:9 エジプトよ。おまえのまっただ中に、主はしるしと奇蹟を送られた。パロとそのすべてのしもべらに。135:10 主は多くの国々を打ち、力ある王たちを殺された。135:11 エモリ人の王シホン、バシヤンの王オグ、カナンすべての王国を。135:12 主は彼らの地を、相続の地とし、御民イスラエルに相続の地として与えられた。

主はご自分を選ばれた者を愛しておられて、そして天地をご自分の望むように動かされる大いなる方です。愛しておられて力を持たれる方は、この民を虐げ、また戦い挑む王たちを倒してくださいました。エジプトから始まり、そしてヨルダン川の向こう側に至るまで、そこにいたエモリ人の王と、バシヤンの王を倒しました。そして無事に、約束の地、相続の地を入れさせてくださいました。主は私たちに対しても、力をもって愛の御業を行ってくださいました。「コロサイ 1:13 神は、私たちを暗やみの圧制から救い出して、愛する御子のご支配の中に移してくださいました。」

135:13 主よ。あなたの御名はとこしえまで、主よ。あなたの呼び名は代々に及びます。135:14 まことに、主はご自分の民をさばき、そのしもべらをあわれまれます。

主をほめたたえる三つ目の理由は、その御名が永久まであるということです。つまり、主は昔も今も、とこしえまで変わらずご自分の民に接してくださるということでもあります。この詩篇を書いたのがバビロン帰還後であれば、九百年ぐらい前の出来事であります。しかし主は変わらない、同じことをしてくださいます。ヘブル書の著者がこう勧めました。「ヘブル 13:7-8 神のみことばをあなたがたに話した指導者たちのことを、思い出しなさい。彼らの生活の結末をよく見て、その信仰にならいなさい。イエス・キリストは、きのうもきょうも、いつまでも、同じです。」

135:15 異邦の民の偶像は、銀や金で、人の手のわざです。135:16 口があっても語れず、目があっても見えません。135:17 耳があっても聞こえず、また、その口には息がありません。135:18 これを造る者もこれに信頼する者もみな、これと同じです。

詩篇 115 篇にもある、偶像の空しさですね。今、国々が自分たちを攻撃したけれども、彼らの信じている神々はこのように命のないものなのだと見なしています。私たちの信仰生活は、時に目に見える成果がないので、挑戦を受けます。エジプトにとっても、ヨルダン川の向こう側のシホンやオグにしても、イスラエルの民は弱々しく、潰してしまえという軽蔑を持っていたのでしょうか。しかし、私たちの主は確かに生きておられます。彼らこそが息を持っていない神なのです。したがって、私たちがどこに目を向けているのかが、大事です。

135:19 イスラエルの家よ。主をほめたたえよ。アロンの家よ。主をほめたたえよ。135:20 レビの家よ。主をほめたたえよ。主を恐れる者よ。主をほめたたえよ。135:21 ほむべきかな。主。シオンにて。エルサレムに住む方。ハレルヤ。

主に目を向けることが大事です。ここで、主はどんな人たちも、主を恐れているのであれば、全てが主をほめたたえよと促しています。一般のイスラエル人も、祭司も、レビ人の家も、そして主を恐れているならすべてが、..もしかしたら、異邦人の改宗者も含まれているかもしれません、..すべてが主をほめたたえます。そして、最後に主をほめたたえているのが、エルサレム、シオンであります。なぜなら、主がここに住まわれているからです。

5A 永久に続く恵み 136

136 篇も 135 篇と同じように、主をほめたたえ、この方に感謝することを歌っています。繰り返して出てくる言葉は、「その恵みはとこしえまで」であります。

1B 天地創造にて 1-9

136:1 主に感謝せよ。主はまことにいつくしみ深い。その恵みはとこしえまで。136:2 神の神であられる方に感謝せよ。その恵みはとこしえまで。136:3 主の主であられる方に感謝せよ。その恵みはとこしえまで。

私たちは感謝することを、しばしば忘れます。これは、意識的な作業、実は献身を伴った行為です。「すべての事について、感謝しなさい。(1テサロニケ 5:18)」私たちは主のために何かをすることは大変だと思いますが、実は私たちは自分たちで何かをしていることのほうが、肉を喜ばせるので楽なのです。それよりも、神の恵みを思い出して、それで主に感謝することは霊的な訓練が要り、大変なのです。主の恵みに留まることです、そして御霊の中に留まり、肉によって完成させようとする過ちから私たちを遠ざけます。

ここでは、主が慈しみ深いこと、それからこの方が神々の神であられ、主と呼ばれている者の中でも主であることに感謝しています。先ほどと主題が同じです。

136:4 ただひとり、大いなる不思議を行なわれる方に。その恵みはとこしえまで。136:5 英知をもって天を造られた方に。その恵みはとこしえまで。136:6 地を水の上に敷かれた方に。その恵みはとこしえまで。136:7 大いなる光を造られた方に。その恵みはとこしえまで。136:8 昼を治める太陽を造られた方に。その恵みはとこしえまで。136:9 夜を治める月と星を造られた方に。その恵みはとこしえまで。

主の恵みは、これら天と地を造られた不思議な業に現われています。

2B 出エジプトから約束の地 10-22

136:10 エジプトの初子を打たれた方に。その恵みはとこしえまで。136:11 主はイスラエルをエジプトの真中から連れ出された。その恵みはとこしえまで。136:12 力強い手と差し伸ばされた腕をもって。その恵みはとこしえまで。136:13 葦の海を二つに分けられた方に。その恵みはとこしえまで。136:14 主はイスラエルにその中を通らせられた。その恵みはとこしえまで。136:15 パロとそ

の軍勢を葦の海に投げ込まれた。その恵みはとこしえまで。

出エジプトにおける、神の力強い業に恵みがあります。ところで、この「恵み」は「愛」とも訳せません。もっと正確には、「真実な愛」と言ったらよいでしょう。いつまでも変わらない、ご自分の約束されたことに従って、最後まであきらめないで伸ばしてくださる愛の御手のことを指しています。その愛は、永久まで続くと歌っています。

136:16 荒野で御民を導かれた方に。その恵みはとこしえまで。136:17 大いなる王たちを打たれた方に。その恵みはとこしえまで。136:18 主は力ある王たちを、殺された。その恵みはとこしえまで。136:19 エモリ人の王シホンを殺された。その恵みはとこしえまで。136:20 バシヤンの王オグを殺された。その恵みはとこしえまで。136:21 主は彼らの地を、相続の地として与えられた。その恵みはとこしえまで。136:22 主のしもべイスラエルに相続の地として。その恵みはとこしえまで。

荒野の旅でイスラエルを守り、それから力ある王たちから救い出してください、そして相続地へ導かれたこと、これらを歌っています。

いかがでしょうか、一つ一つの出来事で「その恵みはとこしえまで」と言っています。主は、確かに私たちを、キリストにあつて救ってくださいました。その罪からの救いは、確かに一切の罪を拭き去ってくださるという恵みではありますが、そこに示された神の愛は、日毎の歩みの中で明らかにされていきます。主が私たちをご自分のところに引き寄せるまで、その日々が主の恵みが明らかにされていく、一つ一つの機会なのです。私たちの人生は、「神の作品」であるとエペソ書2章に書いてあります。神の作品であり、私たちは良い行いのために救われたことを書いています。その作品のギリシヤ語は「ポエマ」すなわち、詩です。主がいかに恵んでくださったのか、永遠の愛をもって私たちを救ってくださったのか、それを知ることのできるポエムだということです。ですから、私たちは、日毎の恵みを感謝すると同時に、主の永遠性、主がはるか先まで私たちを救ってくださったことを感じ取ることのできる一日なのです。

136:23 主は私たちが卑しめられたとき、私たちを御心に留められた。その恵みはとこしえまで。136:24 主は私たちを敵から救い出された。その恵みはとこしえまで。136:25 主はすべての肉なる者に食物を与えられる。その恵みはとこしえまで。

これは、相続地からバビロンによって引き抜かれて、けれども七十年後に帰らせてくださった、その恵みを歌っている野かもしれません。そして、今は食物を与えてくださっています。

6A シオニストの詩篇 137

そして 137 篇は、このバビロン捕囚の時に歌われたものです。

137:1 バビロンの川のほとり、そこで、私たちはすわり、シオンを思い出して泣いた。137:2 その

柳の木々に私たちは立琴を掛けた。137:3 それは、私たちを捕え移した者たちが、そこで、私たちに歌を求め、私たちを苦しめる者たちが、興を求めて、「シオンの歌を一つ歌え。」と言ったからだ。

これまで私たちは、シオンから出る祝福を見てきました。そこに主ご自身がおられるからこそ、としへの祝福がそこから出てきます。そして神の家で主をほめたたえ、そして主がそこから私たちを祝福されます。そのシオンから引き離されたという、深い悲しみをここで言い表しています。バビロンの川のほとりとは、ユーフラテス川やティグリス川のことでしょう。そこで、シオンを思い出して泣いています。そして、捕虜である自分たちを監視している者たちが暇を持て余して、「シオンの歌の一つでも歌え。」と言っています。

彼らは、自分の罪のゆえにその結末を味わっており、深く悲しんでいるのです。しかしこれは良い事です。最も苦しいことは、本人が罪を認めないことです。それを行なうと必ず傷が生まれ、主の働きが止まります。私たちの神の御霊は、平和の実を結ぶ御霊であられ、その平和は正義によってもたらされるからです。しかし、その罪の重さに気づき、押しつぶされそうになりながら悲しみ、嘆くのであれば希望があります。主は必ずや、癒しを与えてくださいます。「主は心の打ち砕かれた者をいやし彼らの傷を包む。(詩篇 147:3)」

137:4 私たちがどうして、異国の地にあつて主の歌を歌えようか。137:5 エルサレムよ。もしも、私がおまえを忘れたら、私の右手がその巧みさを忘れるように。137:6 もしも、私がおまえを思い出さず、私がエルサレムを最上の喜びにもまさってたたえないなら、私の舌が上あごについてしまうように。

「異国の地にあつて主の歌を歌う」というのは、その歌の内容や意味を考えることもなく、異教の環境の中で歌うということです。以前、ドラマのテーマ曲で「アメイジング・グレイス」が使われていましたが、内容は全く違うものでした。もし、私たちの信仰までがそこで歌われている、驚くばかりの神の恵みを忘れて、ただ歌っているようなことになったら、どうでしょうか？それがここで、この詩人の語っていることです。その立琴の巧みさを忘れてしまうように、また舌が上あごに付いてしまうようにと言っています。

彼はエルサレムを思えば思うほど、激しい葛藤の中にあります。エルサレムこそが最上の喜びであると知っているからこそ、激しい痛みが走っています。これはとても良い事です。もし私たちが、キリストが神の右に座しておられる天を忘れたらどうなるでしょうか？天を忘れるぐらいなら、私たちも、このユダヤ人たちのように痛い目を受けたほうがよいのです。そうすることによって、神の恵みが当たり前ではなく、いかに尊いことであるかを思い起こすことができるからです。(ピリピ 3:18-20 参照)

137:7 主よ。エルサレムの日に、「破壊せよ、破壊せよ、その基までも。」と言ったエドムの子らを思い出してください。137:8 バビロンの娘よ。荒れ果てた者よ。おまえの私たちへの仕打ちを、お

まえに仕返す人は、なんと幸いなことよ。137:9 おまえの子どもたちを捕え、岩に打ちつける人は、なんと幸いなことよ。

ここの言葉は、あまりにも激しくてどのように受けとめればよいか、迷ってしまいます。しかし、こうした御言葉が神の靈感を受けた言葉であり、他の箇所で書かれている歴史的背景、また神のご性質をしっかりと読んでいくと、実に正しいことであることが分かります。

まず、エドム人が行ったことを話します。エドム人はユダの国に支配されていましたが、ある時から反抗しはじめました。けれども、バビロンが台頭するにつれて、その地域の諸国は連合して、バビロンに対抗するようになりました。エドムはユダと連合していたのです。しかし、バビロンがエルサレムを包囲し、それを滅ぼす時に、エドムはユダヤ人を助けるどころか、これまで抱いていた、鬱積していた恨みと憎しみを晴らすかのように、「破壊せよ、破壊せよ、その基までも。」と言って裏切ったのです。エサウが弟ヤコブを憎み、長子の権利を奪い取られたその恨みを、子孫全体がユダヤ人に対して持っていました。

そしてバビロンについては、その非人道性は尋常ではありませんでした。確かに主は、ネブカデネザルを「わたしのしもべ」と呼び、ご自分の裁きの器としてバビロンを選ばれました。しかし、主が意図していたこと以上に、彼らは、自分たちの欲しいままに、ユダヤ人を虐げたのです。そして、ここに書かれているような、ユダヤ人の子たちを岩に打ち付けるような残虐なことも行ないました。

これらの国々が行ったことに対して、神は強い言葉で対処しておられます。エドムについては、オバデヤ書全体がそのことを取り扱っています。そしてバビロンの捕囚の民となったエゼキエルも、預言しました。「エゼキエル 35:5-7 おまえはいつまでも敵意を抱き、イスラエル人が災難に会うとき、彼らの最後の刑罰の時、彼らを剣に渡した。それゆえ、..わたしは生きている。神である主の御告げ。..わたしは必ずおまえを血に渡す。血はおまえを追う。おまえは血を憎んだが、血はおまえを追いかける。わたしはセイルの山を荒れ果てさせ、廃墟とし、そこを行き来する者を断ち滅ぼす。」いつまでも赦さない恨みや、人が倒れた時にそれを喜ぶことは、神が激しく憎まれます。

そしてバビロンに対しては、預言者エレミヤを通して神は言われました。「50:7 彼ら(ユダの民)を見つける者はみな彼らを食らい、敵は『私たちには罪がない。彼らが、正しい牧場である主、彼らの先祖の望みであった主に、罪を犯したためだ。』と言った。」「50:15 その回りに、ときをあげよ。彼女は降伏した。その柱は倒れ、その城壁はこわれた。これこそ主の復讐だ。彼女に復讐せよ。彼女がしたとおりに、これにせよ。」したがって、彼がここで吐露している言葉は、個人的な怨念や復讐心ではなく、主ご自身が正義を行なわれることを願っているのです。

「なんと幸いなことよ」と言っていますが、これは正義が果たされたことに対する満足を示しています。「詩篇 106:3 幸いなことよ。さばきを守り、正義を常に行なう人々は。」神は悪人が滅びることは望まれません、悪が罰せられることに満足されます。

7A とこしえに変わらぬ恵み 138

138 篇から 145 篇までは、「ダビデによる」詩篇になります。ダビデの詩篇は、これまでも神の恵みに裏打ちされた、神との深い交わりの中で歌われているものです。そしてダビデの詩篇の後に、146 篇から「ハレルヤ」で始まる「ハレルヤ詩篇」になり、詩篇は終わりを迎えます。今日は 138 篇だけ読みます。

1B 御言葉のゆえの御名 1-5

138 ダビデによる 138:1 私は心を尽くしてあなたに感謝します。天使たちの前であなたをほめ歌います。138:2 私はあなたの聖なる宮に向かってひれ伏し、あなたの恵みとまことをあなたの御名に感謝します。あなたは、ご自分のすべての御名のゆえに、あなたのみことばを高く上げられたからです。138:3 私が呼んだその日に、あなたは私に答え、私のたましいに力を与えて強くされました。

ダビデがこの詩篇を歌った時は、おそらく自分が統一イスラエルの王となった時に、ペリシテ人を始めとする周囲の諸国がダビデに向かって戦いを挑んできたのが背景にあると思います。1 節に、「天使たちの前」とありますが、別訳では「神々の前」となっています。これは、それらの国々が神としてあがめている異教の神々のことです。主はこれらの敵に対してダビデに勝利を与えられました。そして、それら敵どもの真ん中で、主をほめたたえています。

ダビデは初めに神に感謝しています。それから、ほめたたえています。そしてひれ伏しています。感謝して、賛美し、そしてひれ伏します。この順番は、私たちの礼拝の順番としてもふさわしいものですね。そして、神の恵みとまことを思っていますが、ダビデは敵と戦っていく中で神の御言葉を語っています。それは何かというと、ダビデがイスラエルの王として選ばれた者であり、彼によって神の支配する国が広がることを、神は約束なさっていたからです。したがって、敵と戦った時に、神はその約束の御言葉を大に行ってくださいましたことを、彼は目撃しました。それで、魂が力づけられ、「ご自分のすべての御名のゆえに、あなたのみことばを高く上げられた」と言っているのです。

138:4 主よ。地のすべての王たちは、あなたに感謝しましょう。彼らがあなたの口のみことばを聞いたからです。138:5 彼らは主の道について歌うでしょう。主の栄光が大きいからです。

周囲の国々で全てがダビデに敵対したわけではありません。ツロの王ヒラムはダビデが王となったことを知って、彼の宮殿のための資材を送りました(2サムエル 5:12)。ハマテの王トイは、ダビデがハマテの近くの国ツォバがダビデに敵対して戦ったけれども、ダビデが勝利したのを見て、祝福の言葉を述べました(8:10)。ツォバの王ハダデエゼルが、トイに戦いを挑んでいたからです。このようにダビデがイスラエルの王であることを約束された神の言葉に対して、異邦人の王たちも共に喜び、共に歌うことをダビデは願っています。

ダビデは、これをアブラハムへの約束の延長で語っています。神はアブラハムに、「すべての国

民は、あなたによって祝福される。」と約束されました。そしてダビデは、その御国の王となるのです。キリストは再臨される時に、王の王、主の主として来られます。そして今、キリストの福音はすべての国民に宣べ伝えられています。こうして、ダビデの預言は実現しているのです。

2B 成し遂げられる主 6-8

138:6 まことに、主は高くあられるが、低い者を顧みてくださいます。しかし、高ぶる者を遠くから見抜かれます。138:7 私が苦しみの中を歩いても、あなたは私を生かしてください。私の敵の怒りに向かって御手を伸ばし、あなたの右の手が私を救ってください。138:8 主は私にかかわるすべてのことを、成し遂げてくださいます。主よ。あなたの恵みはとこしえにあります。あなたの御手のわざを捨てないでください。

主は、王たちも従うという力ある働きをされますが、その器はいつも、低い者を選ばれて行われます。高くあられますが、低い者を顧みて、ご自分の栄光を現します。したがってダビデは今、自分が苦しみの中にいるということ自体が、正しい道であることを悟っています。その道にいることによって、神が自分を生かして下さっていることを知っています。ダビデの子、私たちの主であるイエス・キリストは、まさにこの道を通られました。神の身分でありながら、人としての性質を取り、仕える者の姿になり、実に死に至るまで神に仕えられました。その十字架によって、すべての悪の勢力を倒し、武装解除させ、捕虜としてさらし者にされました(コロサイ 2:15)。

そして大事な約束が 8 節です。「主は私にかかわるすべてのことを、成し遂げてくださいます。」という約束です。ダビデに神が約束して下さったことは、必ず神が成し遂げられます。それを妨げようとする敵の勢力がいても、主は必ず成し遂げてくださいます。私たちに与えられた神の約束は、これですね。「ピリピ 1:6 あなたがたのうちに良い働きを始められた方は、キリスト・イエスの日が来るまでにそれを完成させてくださることを私は堅く信じているのです。」主は必ず、イエス様が戻って来られる日までに完成させてくださいます。そして、その御心は、私たちの志や願いの中で働きます。「2:13 神は、みこころのままに、あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、事を行なわせてくださるのです。」ダビデと同じように、キリスト者も敵の反対があるのです。しかし、主は必ず御言葉を実現してください。続きを読みます、「2:14-16a すべてのことを、つぶやかず、疑わずに行ないなさい。それは、あなたがたが、非難されるところのない純真な者となり、また、曲がった邪悪な世代の中にあって傷のない神の子どもとなり、いのちのことばをしっかりと握って、彼らの間で世の光として輝くためです。そうすれば、私は、自分の努力したことがむだではなく、苦労したこともむだでなかったことを、キリストの日に誇ることができます。」

そして最後は、「あなたの恵みはとこしえにあります。」です。主の変わらない愛の御手です。すべてのプロセス、過程で、永久の神の御手があります。